

必需品であったので、従来に引続き県内各地の紙漉場でその抄造がなされ、実質的には従前と変わりはなかった。ただし、自由販売許可後は藩の統制がなくなったことで粗製乱造が起こり、一時製紙業の危機を迎えたが、やがて組合の結成等でその危機を免れた。^(注40)これらについては、後日稿を改めて詳述したいと思う。

(注39) 土屋喬雄著『封建社会崩壊過程の研究』弘文堂、昭和二年、四三ページ。

(注40) 土屋喬雄著『封建社会崩壊過程の研究』弘文堂、昭和二年、四三ページ。

四、結 語

本稿は冒頭で述べたように、藩政時代、薩摩藩においても他藩と同様に紙に対する専売制度が実施されていたが、その内容については、これまで必ずしも明確にされていなかったところから、こうした紙の専売制度を現存する史料や研究成果を踏まえて、できるだけ体系的・統一的に再編成しようと試みたものである。しかし、やはり史料面での制約が強く、思う程の成果を挙げることができなかった。今後、史料の発掘に努め、また、研究を重ねて後日を期したいと思う。諸賢のご批判や史料の存在等についてのご教示をお願いしたい。

なお、現在鹿児島県内において、藩政時代から明治・大正時代にかけて見られた多くの製紙地区で残存するものは、わずか二、三に過ぎず、後継者不足等からそれもやがて近い将来滅亡の運命にある。紙に限らず伝統産業の維持ないし復活、あるいは、活性化が全国的に大きな課題となっている今日、過去の専売制度の仕組みの中から、何か一つでも、こうしたことへの参考となるべき事項が得られれば幸いと考えている。これらについてのご教示も併せてお願いしたい。

さらに、安政三年（一八五六）京都紙商人藤屋清右衛門の書写になる『諸藏紙俵印鑑控』には、山代藏（長州萩松平大膳大夫）、岩国藏（防州岩国吉川監物）等と並んで薩州藏（薩州鹿児島島津豊後守）の名が出ており、また、『調所笑左衛門履歴概略』にも「日州其他川内諸所出産の紙を登せ雑紙と名付け、大阪にて賣る」とあり、このころになると、先に述べたような天保の財政改革によって、かなりの量の紙の領外移出が行われていた（むしろ行わねばならなかった）ことが知られる。

しかし、こうした紙の領外移出による経済的效果は、応分の利益は得られたものの、期待した程の額ではなかったようである。すなわち、調所広郷が『財政改革由緒書』の中の『惣御産物』なる項において「大阪御仕登品之内胡摩、雑紙等之儀も外品に準じ、御改革以来者細密之手数に取計差登、御拂口者種々吟味を盡し直進之方に取扱仕候付、いづれも程々に應御利益に罷成候得共、取分け申上る程之金高に相及不申候」云々と述べているところから、それらを伺い知ることができる。

(注33) 『蒲生町郷土誌』二七三ページ。

(注34) 『島津家列朝制度』卷之十六。

(注35) 『島津家列朝制度』卷之八。

(注36) 『島津家列朝制度』卷之八。

(注37) 小野晃嗣『日本産業発達史の研究』法政大学出版局、一九八一年、八四―八五ページ。

(注38) 土屋喬雄著『封建社会崩壊過程の研究』弘文堂、昭和二年、四三五―四三六ページ。

(五) 専売制の廃止

以上述べてきたような紙の専売制度は、慶応二年（一八六六）六月五日に雑紙方の廃止並びに紙類の自由売買を許す旨が布達され、ここに、藩政時代の約二世紀に及ぶかなり永い期間にわたって続けられてきた制度はようやく終止符を打つこととなったのである。当然、各地の楮藏・紙座なども消滅したが、和紙は障子紙を初め生活

迄二御座候、此外他國出之儀無御座候、

とあるように、^(注35)内実はともかく幕府にたいする表面上は、紙の領外移出はなされていなかったことになる。

しかし、その後

一宝暦九年卯年、薩州産物奉申上在之候品書、左之通、

一黒砂糖 生蠟 菜種 胡麻 鬱金 桂辛 伊豆縮砂 柴胡（以下十五品目略||筆者） 紙 玉子 牛馬皮

牛角（以下十三品目略||筆者）

都合四十品

右は、宝暦九卯年、奉申上置候諸産物品書ニ御座候、已上、

薩州定問屋、年番病氣ニ付代

中島屋

享和三亥十一月九日

喜左衛門

同小問屋、年行司病氣ニ付代

平野屋

八兵衛

御奉行様

右之通、大坂問屋より、書出有之、

とある通り、^(注36)江戸時代大坂における薩摩藩の国産販売機関であった薩州定問屋や同小問屋の取扱品目の中に紙

が混じっていることは、既にこの頃において量の多寡はともかくとして、なにがしかの紙の上方移出とその販売が行われていたことを示すものといえよう。

れ、藩内各役所は勿論江戸表藩邸にも送られたが、藩の用を足して猶余りが生じた時は城下（鹿児島市）上流武士へ御申受を許され、その数量は階級によって定めがあった。^(注33) なお、さらに余裕があるときは一般諸人へも払下げが行われたようである。^(注34)

このように、領内における流通・分配業務はすべて藩の手を経てなされ、薩摩藩では多分に商業資本の未発達ということもあつたが、それを抜きにしても、そこに商人の介入する余地はなかつた。

三 製品の領外移出

再三述べるように、薩摩藩における紙の抄造と専売制度の適用が、藩内における自給と貧困郷士の救恤に役立っていたことから、江戸や大坂の藩邸で使用されるものを除いて、いわゆる商品として領外で販売されることは、あまりなかつたようである。すなわち、宝永七年（一七一〇）、幕府上使への「御答書」の中で、

一 御分國中土産

野駒	茶入	茶碗	<small>付皿之類</small>	桜島	蜜柑	七島	鯉節
赤貝鹽辛	小熬海鼠	依黄	<small>(硫力)</small>	樟腦	生蠟		
檉子	米	粟	黍	稗			
大豆	麥	蕎麥	大角豆	八重成	<small>ママ</small>	小豆	
胡麻	唐芋	酒	菜種子	麻	芋		
鹽	<small>但、國中不足仕、上方より買下シ申候、</small>	桑	<small>(買力)</small>	漆	<small>少計</small>	藥	
柿	紙	木綿	<small>但、出來惡敷、上方より賣下申候、</small>	鐵	棕	栢	

右之内、所二より、植不申物も御座候、上方并長崎へ差越賣拂、江戸入用續方仕候ハ、米・菜種子・生蠟・樟腦

杉尾某を傭って来て、始めて紙漉の仕事始めた。杉尾氏は製紙に熟練しており、三枚紙その他種々の紙を漉いた。治右衛門自身もまた杉尾氏に従って製紙に従事した。

次に享保三年（一七一八）五月、他に鹿兒島から製紙人肥後某を雇い入れ、紙業の隆盛を計り、村民も伝習して製紙に従事した。同年八月始めて『杉原紙』を製紙した。次いで赤塚家も亦杉原紙の製造をはじめ、両家の製品は鹿兒島へ売り出された。

同十年（一七二五）五月に至って、治右衛門自身は製紙の業に熟達し、且つ村民も本業を伝習し得たので製紙師の杉尾、肥後両氏の雇いを解いて帰郷せしめた。

元文元年（一七三六）になって、青張紙の製造がはじめられた。此の紙は傘張用に最適であるので、諸方から註文が夥しく、また、近郷加治木紙に比し、紙質が強く廉価であったので、一般に愛用された。^(注31)と『蒲生町郷土誌』に記述されているところを見れば、上記の他にも杉原紙等が漉かれていたのがわかる。^(注32)しかし、これらが何時頃までどの程度抄造されていたのかは不明である。

（注30）柳橋 真著『和紙―風土・歴史・技法―』講談社、昭和五六年、二二七ページ。

（注31）『蒲生町郷土誌』二七四ページ。

（注32）「杉原紙」は播磨の杉原（多可郡杉原谷村）地方で漉かれた紙の名前であるが、「檀紙」が公家の間で広く用いられたのに対し、この杉原紙は武家の公的用紙として尊重愛用された当時の高級紙である。

二 製品の領内流通

各地の楮蔵に上納された製紙は、例えば下紙、座帳、半切の各紙は十六束を一丸とし、百田紙は二十四束一丸、半紙は七十束一丸、尺違紙は四十八束を一丸というように荷造りされ、馬便により送人を一定して幾回も鹿兒島新楮蔵へ発送された。これを「津下し」と称した。こうして藩の楮蔵に収納された紙はすべて藩用に供せら

(注27) 『鹿児島県史』第二卷、五二七ページ。

(注28) 『蒲生町郷土誌』二七〇ページ。

(注29) 専売制度による過酷な統制は、場合によっては生産そのものを停滞に導き、さらには農村の荒廃をひきおこすものであった。とくに商品の生産が生産条件にめぐまれない山間部農民の生業としておこなわれ、あるいは、その生産が農間余業として各農民の生計と密接にむすびつきこれを補充するものであればあるほど、徹底した統制は農家の経営それ自体を破壊に追い込むものであった。水田耕作だけでは生活することができずに、副業によってやっと生活している農民に対して、その副業の利益をもすべて収奪することは、農民を窮地に追い込む以外の何物でもなかったのである。(吉永昭著『近世の専売制度』吉川弘文館、昭和四八年、六ページ。)

専売制度に反対する農民一揆はこのようにして生じてきた。例えば四国高知藩や吉田藩、九州の唐津藩や臼杵藩などでの一揆がそれである。また、水戸藩、福井藩などのように生産者の反対や騒動によって紙会所の廃止に追い込まれたところもある。

(四) 製品の種類とその流通

一 製品種類

製紙の種類や質については、すでに一部触れたように、中には上質のものも含まれていたが、概して雑多で下等品が多かった。すなわち、上百田紙、百田紙、下下百田紙、上下紙(下紙の中でも上級のもの)、下下紙(下紙の中で下等のもの)、蔵方紙、座帳紙、半紙、中半紙、皮紙(かす紙)、尺違紙(寸法の違った紙)等々である。この内の百田紙は「杉原紙」や「西之内紙」などと同様に、^(注30) 原産地(筑後八女地方の迎春村字百田)の名前を取ったものであるが、それ以外は、全く以て殺伐な官僚的名称という他はない。その理由としては、これもすでに述べたように、藩の施策が藩内の自給と貧困郷士の救恤を目指したものであり、従って、今日での所謂「ブランド品」たる高級紙生産より、むしろ量産主義に重点がおかれ、その名称も単に製品の区別がつけば充分と思われたからであろう。

もっとも、「正徳五年(一七一五)筆者注、以下同じ」八月、有村治右衛門は日向国諸県郡高岡郷から指導者

み、囃々掛け声と共に抄紙に精励したものである。」^(注28) というように仕事の如何によつては、大きな利益をあげ素封家にもなれる可能性があったのである。

従つて、この紙に限つてのことであるが、専売制度施行によつて、多くの藩が経験したような一揆や騒動などは薩摩藩の場合、起こりえなかつたといつてよい。加えて、郷士という低い階級であつたとはいえ、一応武士として位置づけられていた人々の手によつて抄造されていたことも、その身分柄（或いは体面上）こうした一揆や騒動を生ずる余地をなくしていたと考えられるのである。

(注23) 吉永 昭著『近世の専売制度』吉川弘文館、昭和四八年、一二九ページ。

堀江保蔵氏はその著『我国近世の専売制度』（日本経済史研究所、昭和八年）の中で「宇和島藩にては文化年間主要国産である半紙及泉貨の専売制度を確立し、此等を主として大阪へ移出する事とした。製紙業の奨励・製品の買上を掌る半紙方・泉貨方の両役所が、共に藩札発行機関たる札座の下級役所であり、買上資金並びに製紙業者に貸与すべき資金を札座より受け、（中略）又半紙方役所に付属し、製紙原料たる楮の購買を独占せる楮方が、やはり買上資金を札座に受けたことは、（中略）すなわち藩札発行機関と専売機関とが密接なる関係を保つことによつて藩札の発行は容易であり、専売も亦円滑に行はれ得たのである。」とされ、こうした「領内限り通用の藩札を以て国産を購ひ、之を大阪・江戸其他の商品集散地又は消費地に賣捌いて天下に通用する金銀を得るのであるから、たとひそこに買上価格と賣捌價格との間に開きが無かつたとしても、藩は無利子の正金銀を借ると等しき、或は割引料なき約束手形を永久に振出すと等しき効果あるは見易き所である。藩が正金銀の獲得を切望せしは、言ふまでもなく江戸・大阪等に於ける支拂に充てんが為であるから、正金銀はたとひ額面に於て藩札と同じであるとしても、藩に対する機能上の價值は頗る大なる道理である。その上専賣商品の買上價格が藩の意志によつて強制せらるるならば、商業利潤も之に加はり、藩の利益は莫大なるものとならざるを得ない。」として藩札による専売商品の買上と、その領外移出による正貨の獲得の利益を説かれている。

(注24) 吉永 昭著『近世の専売制度』吉川弘文館、昭和四八年、六一ページ。

(注25) 「下紙は百田紙よりも品質がよく、厚目も強く、縦横も一寸広く、貴重で藩用紙であつた。蔵方用紙および座帳紙も同じく一寸広であり、公務専用紙に用いられた。但し、座帳紙は質は、下等紙であつて、公務日常の雑用に供せられた。この二種は『着色紙』であつて、赤色に染めた紙である。染方は櫛皮を煎じ詰め、これに『なめら葉』を搗き揉んだのを加え、その搾り汁を漉船に入れて漉き上げて、赤色としたもので、この着色紙は一切普通人の使用を禁ぜられた」『蒲生町郷土誌』二七二ページ。

(注26) 山方町文化財保存研究会編『西ノ内紙』筑波書林、一九八一、三九〜四三ページ。

も江戸商人が領内に入り込んで、買い取ることが多かったところから、必然的にこれら江戸商人より、生産資金として金を前借りすることも多く、ために製品である紙を安値で買い取られ、困窮に陥っている紙漉人を救済するため専売制度を制定せざるを得なくなったのである。^(注26)

これに対し、薩摩藩の場合は「楮の植栽と共に、藩は紙屋或いは紙座を高岡、其の他諸所に設けた。例えば、蒲生の紙座は、同地の貧窮衆中の副業たらしめんとして、彼等に製紙を伝習せしめ、原料楮を給し、薪も藩林より伐採せしめ、製品は上納紙とし、他売を禁じ、技術の漏洩をも厳禁して、持高十石以下の衆中に従事せしめたといふ。樋脇塔之原の紙座は安永八年（一七七九）筆者注の創置に係り、之も貧窮郷士救助のためといふ。生産者は各一人に十六貫の楮皮包三丸、計四十八貫を渡され、内二丸で百田紙なる上納紙を製し、残り一丸の製紙を藩に売納するか、或いは雑紙として一般に売り、賃分を得、その内から紙座役人の扶持、其の他の雑費を支払った。^(注27)」というように、持高十石以下の貧窮郷士救済のために始められたものである。

従つて、他藩の多くで見られるような、また、薩摩藩自体も三島の黒糖専売で見せたような徹底的な収奪はここでは見られない。それどころか、「楮の下げ渡は各自通帳によつて受取るのではあるが、之に対する紙の上納はその技能の巧拙と勤怠又は事故の如何によつて、各戸不揃いを来すのが常であるから、勤勉な者は他人の分迄製紙をなし、一小屋組合中の製紙を取り揃え上納するのである。又一小屋組合に於て所定の製紙を期限内に上納する見込みのない時は、他方限の小屋組合に依頼して製紙をなすこともあった。而して技能上達の者は一人で二十廻り以上も漉き上げ、他人の幾倍収得を享けて、資産忽ち豊かとなるものもあった。殊に上百田、上下紙、御蔵紙の如き上質の紙は漉き得る者が少なく、又所定量を上納し得ざる者もあったので、通帳に割り当てる数量以上上質の紙を上納せるものには楮蔵から特に褒美を与えられていた。当時にあつては斯の様に製紙に勉励する者はその利得潤沢であり、素封家に入るの望みがあれば、壮年烈婦の輩、夏は泉の汗に染み、冬は剣の霜を踏

坂に近い他藩の多くが、自領内で漉かれた紙をこれらの地区へ移出版売することによって、商業利潤を得ていたのと異なり、薩摩藩の場合は、確かに後期になってからは上方への移出が行われるようになったものの、少なくとも専売制度が実施された当初においては、自給を目的としたものであって、領外移出による商業利潤を目指したものでないことを示している。

第二に藩内貧困武士の救恤である。先述したように薩摩藩の武士の多くは郷土と呼ばれる階層であり、これらは屯田兵的性格の存在であったから、耕作する土地を与えられてはいたものの、概して面積は狭く、なかにはそれさえもなくて親や家督を継いだ兄弟の土地、或いは、他人の土地を借りて耕作するものも少なくなかった。当然、薄祿による貧困に苦しめられていたが、これら薄祿の武士を救済するための方途として抄紙の業が選ばれたのである。

これも、すでに述べたように救恤の方法として専売制度が用いられた例としては水戸藩のそれがある。しかし、水戸藩と薩摩藩とは、内容的に大きな違いが見られる。

水戸藩の場合も、確かに藩が「利欲の為」ではなく、「民御救」または「村々賑」すなわち、農村繁栄のために「御手前買」といわれた専売仕法を始めるに至ったのであるが、その動機については、貞享五年（一六八八）九月三日郡奉行等関係役人に示されたものと推察される定書二十カ条の中に、

一、此度御手前買仰付けられ候儀は、連々紙漉とも江戸より前金大分に借る故困窮の段、聞し召しに及ばれ、御救の為仰付られ候。全く御利欲の為に之なく候。此旨専一に役人中相守らるべく候

一、江戸表商人より連々借り置候紙前金は吟味を遂げ、此度話相済み候年譜の通り、江戸商人へ御金を返済いたし、紙漉分より上納致す様御無利に見合い、少しづつも痛み申さず様取立て申す可く候

とあるとおり、それ以前においては領内領外の商人が「直買直売」といわれた紙漉人との直接取引を行い、中で

(三) 専売制度実施の目的

ところで、紙に対する専売制度の実施は、当然のことながら、多くの藩で専売による益金の収得を目指すものであったが、こうした専売益金収得以外にも、また、それぞれの藩の特殊事情が存在したようである。たとえば宇和島藩や大洲藩では藩札による紙の独占と、その大坂移出による正貨の獲得が目的であったし、水戸藩では、後に述べるように、江戸商人の前貸資本の重圧に苦しむ藩内紙漉人の救済をその主な目的としていた。また、越前藩でも寛政四年(一七九二)に京都出の紙について、品質の保持と市場の確保のために御蔵紙の制度が実施された^(注24)というようものがそれである。

薩摩藩の場合も同じく、専売益金の収得よりも、むしろ紙の自給と先述した藩内の貧困武士の救恤とがその主な目的であったと思われる。

第一の紙の自給については、これも先述したように、専売制度が施かれる以前においても、確かに領内で紙の抄造が行われていたが、その量はまだ藩内の需要を満たすには充分ではなく、従って領外よりの移入にまたなければならなかった。そのことは、とりもなおさず、領内からそれらの藩ないし商人への正貨の流出を意味し、また当時の紙は今日と違って、比較的高価なものであったから、一層正貨の流出は大きなものとなり、当然、こうした状況を打開するためには、藩内の抄紙を奨励するだけでなく、充分な量を確保する必要があった。専売制への移行は、いわば必然的な流れであったといってよからう。

そのことは、また、藩内で抄造されていた紙の種類によっても類推することができる。すなわち、藩内で抄造されていた紙の種類は百田紙、下紙、蔵方用紙、座帳紙等であり、このうち百田紙はさらに上、中下、下下の三種に、また下紙も上、下の二種に分けられていた、というように、名称にしてからが、全くの官僚的であったことに加えて、そのいずれもが藩用紙として用いられていることから、^(注25)まず質よりも量に重点が置かれ、江戸、大

なお、紙漉職人も自由に許されたのではなく、一定の数に限定されていたことが『蒲生町郷土誌』の記述で知ることができる。すなわち「紙漉の戸数は一定数に限定されて居り、各戸に通帳を渡された。この通帳は代々譲り渡すべきもので、これにより楮を下げ渡されるのである。所謂世襲の性質を持つが、中には事情によって紙漉を中止して居る者もあったから新に紙漉をなす者は、この明き通帳を借用して、他人名義の通帳によって紙漉を行い、楮の下げ渡し、紙の納入をなした。」というのがそれである。また、蒲生と並んで藩内の二大紙漉地といわれた伊作でも紙漉戸数は六百余戸に指定され、新規就業の者はこの指定人名義で取り扱われたということである。^(注22)

(注14) 吉永 昭著『近世の専売制度』吉川弘文館、昭和四八年、二ページ。ならびに堀江保蔵著『我国近世の専売制度』日本経済史研究所、昭和八年、十六ページ、三九ページ。

(注15) 「主取」は、元来町人の職であるが、それまで奪わなくてはならないほど、下級郷士は生計が困難であった。(『祁答院町史』二二九ページ)。

(注16) 『蒲生町郷土誌』二六八ページ。

(注17) この楮は皮楮と梢楮の二種に区別されていた。皮楮は楮の木を刈り取った後長さ約二尺に切り、これを蒸して皮を剥ぎ乾燥して束にしたものを言い、また梢楮はその枝先の部分をこのように称して両者を区分した。

(注18) 『宮之城町史』五三八ページ。

(注19) なお、鹿児島市池田米男氏の研究によると、自業紙に要する楮は楮蔵に於いて御用紙用に割り当てられた楮の漉き残りの楮を用いる外、郷中及他郷よりも買い入れていたということである(『蒲生町郷土誌』二七三ページより)。こうしたことから、たとえば、宇和島藩では製紙の原料である楮を楮方役所を通して独占し、これを紙漉業者に渡して紙をつくらせ、これを紙方役所を通して再び独占する仕組みになっていた(吉永 昭著『近世の専売制度』吉川弘文館、昭和四八年、七ページ)というのと、幾らか違いがあるのがわかる。すなわち、宇和島藩では原料、製品とも完全に藩の独占体制の中に組み込まれているのに対し、薩摩藩の場合は、製品では厳重な専売の網を被せられているが、原料は藩から割り当てられた分を納入した残りについては、ある程度自由な流通が許されていたと思われるのがそれである。

(注20) 『蒲生町郷土誌』二七三ページ。

(注21) 紙座を藩内諸所に設けたということであるが、具体的には高岡、蒲生、伊作、出水、樋脇塔之原以外の場所は筆者にとって今のところ不明である。

(注22) 『吹上町郷土誌(現代編)』一三四ページ。

紙座という)なるものを設置してそこで楮の収納及び製紙の事を掌らしめたが、この楮蔵には藩より蔵方目付が見分役として毎年出張して来て一切を主管した。さらにこの蔵方目付の他に郷士中から任命された紙座役人が一人、主取^(注15)二人、手伝一人が勤務して事務を掌っていた。紙座役人は楮の納入、交付及び紙の納入、漉賃の払い渡しを、また主取は主として納紙の鑑定を行い、手伝は楮蔵内に居住すべき蔵の番人であったが、実際には従者を代わりに居住させて事に当たらせていた。^(注16)

この楮蔵にまず楮^(注17)を藩民の石高に応じて必ず一定量を毎年上納せしめたが、明治初年まで、それは高一石につき楮五百二十目の割という定めであった。

藩の楮蔵に収納された楮皮は次いで紙漉場に通帳によつて交付され、そこで漉かれた紙は原料楮に対して一定の量を藩の紙蔵に納入させられた。また、製紙業者には所定の漉賃が支給された。^(注18)

ところで、藩の楮蔵に上納する蔵紙以外の残漉は自業紙と呼ばれていたが、この自業紙といえども自由売買は禁ぜられ、一旦必ずこれらを収める蔵、すなわち雑紙蔵に収納せしめられた。若し雑紙蔵に納入せず密かに他に側売りをして、横目衆に発見された場合は厳罰に処せられたということである。もっとも、この自業紙の自由売買禁止は、他の史料の記述などと対照して推測すると、専売仕法制定当初からのものではなく、多分に後代、特に文化・文政時代の財政逼迫による国産の上方販売に伴う専売仕法の強化によるものと思われる。

ともあれ、自業紙を収納するこうした雑紙蔵には年中、藩から下代が詰め切つて之を掌り、外に郷士から選ばれた役人二名が出勤して紙の等級を定め、之れによつて紙代を下げ渡し、また、紙には極印を附し、一定の割増価格を以て希望のものに払下げたとのことである。^(注20)

このようにして、薩摩藩では紙に対する専売制度が実施されていたのであるが、こうした楮蔵や雑紙蔵すなわち、紙座は蒲生を始めとして藩内各所に設けられていた。^(注21)

(注9) もっとも『鹿児島県史』は『蒲生野史』、『蒲生町郷土史』、『始良郡西史』等を参考にして記述されたものであり、これらはまた上記『蒲生町郷土誌』の編纂に際して、その原資料として用いられたと思われる諸史料なので、両者の年代がほぼ一致するのは当然のことである。

(注10) 『鹿児島県史』第二巻、五二七ページ。

(注11) 美濃の加納藩は徳川時代、傘の産地としてその名が知られていたが、多数の傘職人とともに家中の藩士も家内工業として骨削り・轆轤作りを行い、幕末に至っては藩主が之を領外に移出しその収益を収めんとしたということである。

(堀江保蔵著『我国近世の専売制度』日本経済史研究所、昭和八年、六七、九〇ページ参照)

(注12) 「守護時代に於ける士の土着生活は、全国普遍の事実であるが、分国時代より藩政時代に入り、一般に士は城下に集中されたのである。しかも、薩藩に於いて、多数の士が土着生活が続けた事は、特異の事実である。寛永十年、幕府巡見使小出吉親等も、諸外城に於ける城地の存置及び給人の屯聚につき質問したが、之に対する家老川上久国の答へによれば、要するに、先きに義久が九州を領したのに、秀吉下向の際、領国は二国半に縮小せられ、従前の士全体を城下一所に居住せしめ得ず、之を諸所に置くのであるといふ。」(『鹿児島県史』第二巻、二六六ページ。)

(注13) 出水郷の中でも比較的知行高の多いものが揃っている麓衆中に限ってみても、十石以上は全体の八・二六%、平均石数も五・六四石にしかない。

(二) 専売仕法

堀江保蔵氏の優れた研究『我国近世の専売制度』によると、紙に限らず一般にある特定商品を専売制の網にかけ、それらを獲得する型式としては、藩みずからが資金を出して直接商品を購入する「直接的購買独占」と、藩が特定の商人に依頼して商品を独占する「間接的購買独占」、さらに藩が特定の商品をみずから藩営の形で生産して独占する「生産の独占」との三つの形態を数えることができる。また、その独占した商品の販売にあたって、藩が領内で生産された商品または領外から移入された商品を一手に領内に販売する「領内配給の独占」と、商品をみずから大坂市場等の領外に送って利益を獲得する「領外移出の独占」、あるいは以上の二つの形態を藩が同時に実施する形態などがある。^(注14)

薩摩の紙の場合は、この中の「直接的購買独占」に該当する。すなわち薩摩では、藩内各所に楮蔵^{かじくら}(公式には

る。そして、この郷のそれぞれに、いわば屯田兵とでもいうべき郷士を配し一朝有事の際の守りを固めたのである。従って郷士の数も多く、鹿児島城下士も含めると武士の数は別表の如く藩内人口の四分の一以上(二六・三八%)を占めることになる。他県のそれがわずかに〇・五六%であるのに比べれば、その多さの程が理解されよう。なお、『薩隅日地理纂考』によれば、士族数が平民数を上回る郷が十一を数えたということである。

こうした郷士の多くは薄祿の武士であつた。その一例を示せば、国境防衛の任に当たり外城中、最も精強を誇つたといわれる出水郷では、元和六年(一六二〇)の『薩州出水衆中軍役高帳』によると総数一、一三一名中十石以上の知行高を持つ者は、わずか五八名で全体の五・一三%に過ぎない。残りの九四・八七%は十石未満であり、中には一斗だとか、或いは全く知行高のない者もあり、全体平均が四・二三石となつてゐるところからもその薄祿さを知ることができる。^(注13) 他郷においても大同小異の状態であつた。また、こうした状態は藩政時代を通じて変わらず、むしろますます苛酷さを増していったのである。

従つて、これら貧困郷士を救済する意味で、他藩では職人の仕事とされたものも武士の副業として取り込む必要があつたのである。紙漉きもその一端に他ならない。

族籍別人口表

族 籍	薩隅日三州	%	全 国 (明治六年)	%
平 民	五六八、六四三	七三・六二	三二、一〇六、五一四	九八・九
士 卒	二〇三、七一	二六・三八	一、八九五、二七八	〇・五六
僧尼及神官			一四六、四九四	〇・五〇
総 計	七七二、三五四	一〇〇	三三、二九八、二八六	一〇〇

(注) 原口虎雄著 歴
『鹿児島県の出
史』(山川出版
社) 160ページ
より引用。

(注7) 『蒲生町郷土誌』二六七ページ。
(注8) 『鹿児島県史』第二巻、五二五ページ。

注)、家老島津久通は楮の増植・改良に留意し、長門・周防等より楮苗を取寄せ、また紙漉師松岡美濃を招き、紙漉方を始めたといふ^(注8)とあるとおりその創始年代は、一応十七世紀中葉ごろとなっている。^(注9)

さらに時代は遙かに下がるが、十九世紀前半において島津重豪も製紙の改良・増産に努め、新たに「雑紙方」の一局を設けたということである。^(注10)

ところで、薩摩藩における紙専売制の特徴の一つは、後述するようにその制定の目的が貧困郷士の救恤に置かれていたことから、当然の帰結と言えるが、専売組織の重要な一端をなす紙の抄造が、専ら郷士によって担われていたということである。少なくとも、江戸時代の全国各地における紙漉きの業は専業・副業を問わずその殆どが農民によるものであった。これに対して、薩摩藩の場合は上のように郷士によって担当されていたのである。

士農工商という身分制度の存在した江戸時代において、内職とはいえ、公然と藩当局によって認められ、また、推奨されたこのような制度は、加納藩の傘生産の事例を除いて、極めて稀なものであったといつてよい。薩摩藩では紙漉きだけでなく、その他、大工・左官・桶屋・鍛冶屋等、他藩では、いわゆる職人の仕事と見られていたものも武士(もつとも下級ないし郷士階級のものであったが)の職業として広く行われていた。このような職人の仕事は、なぜ、郷士とはいえ武士の職業となったのか、ということについては薩摩藩における郷士の制度と郷士人数の多さ、ならびに大半の郷士の薄録さとを説明しなければならない。

藩政時代、薩摩藩には「外城制度」なるものがあり、この外城とは「元来本城に対する外衛の支城」であり、島津氏前代の制度においては、本城を中心として領内各地にこのような支城を配置し、防衛拠点とする一方、それを中心とする内政上の区劃を設けたのである。其の城砦施設は慶長廿年閏六月、徳川幕府の発したいわゆる一^(注12)国一城令と共に全廃せられたが、城跡は何れも城山或いはお城と呼ばれ、なお有事の際は利用されるべきものであった。この外城は後に「郷」と改称されたが、その数は薩隅日の三国で一・二・三カ所の多きに上ったといわれ

「薩摩では中郷・東郷・宮之城・大村・伊作、大隅では末吉・加治木・蒲生・垂水・小根占・大根占・佐多等の諸郷で、更に、日向では高岡・綾・倉岡・穆佐」といった名が掲げられているように、旧薩摩藩内のほぼ全域にわたって、製紙業が普及していったと考えられるのである。

(注3) 柳橋 真著『和紙』講談社、昭和五六年、二二六ページ。

(注4) この伊作紙業についての島津日新齋創始説は『鹿児島県史』の中には見当たらない。『鹿児島県史』では加世田の鍛冶、阿多の桶屋、田布施の木挽、永吉の大工は日新齋の奨励に始まるとしているが、伊作の紙漉きには触れられていない。しかも加世田の鍛冶以下の諸業種は、いずれも「日新齋の奨励に始まると口碑に伝えられ」とあるだけで、確たる史料に基づくものではない。

(注5) 『鹿児島県史料』第二巻、五二五ページ。

(注6) 『三國名勝図会』は薩摩、大隅、日向の三國における山水・居所・橋道・神社・仏寺・旧跡・物産・叢談等を記載した、今日でいう観光案内書に似たものである。

三、薩摩藩における紙の専売制度と製品流通

(一) 専売制度の開始

上述のように、幕末時期の薩摩藩では藩内の各地において紙漉きの業が行われていたが、それらが、何時の頃から専売制度の下に組み入れられていったのか、すなわち専売制度の開始についての正確な年代は必ずしも明確ではない。

通説としては『蒲生町郷土誌』の「正保二年（一六四五）筆者注」宮之城主島津図書頭久通が入って島津本家の家老となり、一意専心藩政の改革に当たり殖産工業の振興を企劃した。即ち、藩内各所に楮蔵（公式には紙座と言う）を設置して、藩の御用紙を漉かしめ、又別に雑紙蔵を置いて、藩民の自業紙を漉かしめ、所謂統制製紙の法を制定した」との記述、あるいは『鹿児島県史』での「初め正保乃至寛文年間（一六四四―一六七二）筆者

とはいえ、こうした年代における紙漉きの業は、まだ、微々たるもので、本格的に普及するに至ったのは、戦国時代後期から近世にかけてであろうと思われる。例えば、島津日新斉が貧困郷士のために紙漉きを行わせたというのがそれである。明治三六年一月編纂の『伊作村是(坤)』に「製紙業の起源は往昔日新公時代に興れり公は當代の明主にして貧困士族輩に産業を授けんと欲し斯業を興されしと云ふ」とあり、これはその後大正十二年に鹿児島県日置郡役所が編纂した『日置郡誌』にも継承され「薩隅ノ戦乱を平ゲテ民ヲ悲惨ナル修羅叫喚ノ中ニ救イタル日新公聡明ノ天資ヲ以テ能ク儒仙一道ノ精髓ヲ得教化ヲ布キ文武ヲ励マシ幾多ノ英主賢臣ヲ輩出セシメ伊呂波教訓歌ヲ作りテ士道ノ真髓ヲ説キ長ヘニ敦厚忠実ノ美風ヲ涵養セシメ農工ヲ勸奨シ屯田ノ法ヲ布キ本村薄祿ナル武士ノ為ニハ特ニ製紙業ヲ創始サレ(後略)」と伊作村紙業由緒の概要が述べられている。

もつとも、この島津日新斉創始説は飽くまで「口碑」に基づくものであり、確たる史料があつてのことではないが、^(注4)ともあれ、すでにこの頃においては、このような口碑が存在するまでに紙業の発達があつたことは間違いない事実のようである。

下って、江戸時代になると、後述のように島津久道が楮の増植・改良に留意し、長門・周防等より楮苗を取り寄せ、また紙漉師松岡美濃を招き、紙漉方が始められている。^(注5)さらに、文化中より文政に至り藩の財政が漸次困難になるに従つて、国産の多くを上方に登せて少しでも財政収入の増加を図る必要に迫られてきた。そこで、先の『調所笑左衛門履歴概略』によると「国産ヲ精良ニシテ上輸スル事ニ着手シ」、天保二年(一八三一)より「三島へ宮之原源之丞等ヲ渡シ砂糖惣買入ト云フ事ニ従事ス其他ノ産漸次ニ精ヲ究メ微ニ入り天保五六年ニ及ンテハ皆緒ニツキタル故ニ同年ノ冬負債五百萬円ノ消却ノ法ヲ施シタリ」とあるように、紙の場合も「楮苗ヲ肥前大村ヨリ買ヒ其傳ヲ受ケサセ」るなどして「日州其外川内諸所出産ノ紙ヲ登セ雜紙方ト名付大坂ニテ賣ル」ことになったのである。こうしたことから、天保十四年(一八四三)編纂の『三國名勝図会』^(注6)に紙漉きの場所として

大隅國 行程十二日。下六日。

調。綿。布

庸。綿。布

中男作物。紙。

薩摩國 行程十二日。下六日。

調。鹽三斛三斗。自余輸三綿布^一。

庸。綿。紙。席。

中男作物。紙。

とあることから、少なくとも延喜年間（九〇一―九二二）にはすでにこの地域で紙漉きが行われていたことを知ることができる。

さらに、近年の研究によれば、正倉院文書の中にある天平八年（七三六）の薩麻国正税目録帖（断簡九帳）は、当時、国府の使用する必需品が、現地調達を原則としていたところから、この正税目録帖の紙も、国府の周辺で作られた地元産の可能性が強いと推測されており、もし、この説が正しいとすれば、上述の延喜年間よりもさらに二世紀程上代に遡ることになる。^{（注3）}

こうした延喜年間や天平年間説に対し、現在鹿児島県にただ一軒だけ專業の紙漉業者として残っている野村正二氏はその著『ふるさとの歴史を訪ねて―手漉き和紙編』（昭和六一年）の中で諸種論証の末「わが国紙漉きのルーツは大隅国にあり」と大胆な説を提示されている。もっとも、この説にはかなりの疑問点があり、それらの解明が今後の課題であるが、ともかく、少なくとも八世紀後半から九世紀前半ごろにはこの薩隅地域でもすでに紙漉きが行われていたと推測されるのである。

しているところから推測されるように、紙が専売品の一つであったことは間違いないと思われる。^(注2)

ところで、周知のとおり薩摩藩における各種専売品の中でも、大規模、かつ、周到綿密で甚だ巧妙にその制度が仕組まれ、大なる利益をあげたのは砂糖である。従って、この砂糖の専売制度については、これまで多くの人々によって研究・調査がなされ、その成果についても見るべきものが少なくない。しかし、紙の場合は、後述の如く藩政時代に藩内のかなりの地域で抄造されていたにもかかわらず、史料の乏しさから、その実態は殆どと言って良い程明らかではない。特に製品流通の面で、その感が強い。もちろん、先学による幾つかの貴重な研究がないし論述はあるものの、なお、断片的であって、体系的・統一的という面から見れば、残念ながら不十分と言わざるを得ない。

そこで、今これら先学の業績に依拠しながら、薩摩藩における紙の専売仕法、他藩のそれとの相違、製品流通の範囲といったようなことを、可能な限りで解明し纏めてみたいと思う。しかし、既に述べたように、史料の乏しさから、これまでの研究の域を殆ど出ない恐れが多分にあることを予めお断りしておきたい。

(注1) 吉永 昭著『近世の専売制度』吉川弘文館、昭和四八年、一三三―一三三ページ。

(注2) 土屋喬雄氏もその著『封建社会崩壊過程の研究』(弘文堂、昭和二年)の中でそのように指摘されている。

二、薩隅地域における紙の抄造史

薩摩藩における紙の専売制度を探究するに当たって、まずその前段階として、当該地域における紙抄造の歴史を通覧しておくことが必要だと思われる。以下簡単にそれに触れておくことにしよう。

薩隅地域での紙抄造の起源はかなり早い年代にまで遡り得るようである。『延喜式―主計上―』に、

薩摩藩における紙の専売制度と製品流通について

高 向 嘉 昭

一、はじめに

江戸幕府時代、国内各藩では当該藩内で生産される各種国産品について専売制度を実施し、商品独占化の試みがなされていたが、なかでもその対象となった品目は紙が最も多く、萩・岩国・徳山・津和野・浜田・清末・豊浦・広島・水戸・福井・富山・上田・大垣・尼崎・宇和島・高知・松山・徳島・大洲・吉田・西条・今治・福岡・唐津・飫肥・臼杵・延岡・佐土原・高鍋・小城・佐伯などの諸藩で、この紙に対する専売制度が実施されていた。^(注1)

薩摩藩でも、かつて天保の財政改革時代、調所広郷の下にあつてその改革に従事した海老原雍齊宗之丞が明治十五年に書いたといわれる『調所笑左衛門履歴概略』の中で「三島ノ砂糖ヲ根本ニシテ米ハ壺万八千石日州川内出水肝付ノ租ニシ改革以来俵ハ肥後米ニ倣ヒ至テ精造シ菜種子ハ指宿山川頼娃両根占田代佐多ヨリ出シ鬱金胡麻薬物朱粉紙蠟牛馬ノ類ニテ煙草鯉節硫黄明礬櫓木牛馬皮椎皮椎茸等ニ至ツテハ商人ニ利ヲ得サセシカ為ニ関セス又沖ノ永良部ノ一島ハ従来交易ノ利ヲ人民ニ与ヘ屋久島ハ士族ノ利ニ着手セサリシ事ナリ」(傍点筆者)と記述